

2014 1/28

No.1963

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—



「成人の日」の13日、神奈川県内で8万5684人が門出を迎えた。横浜市港北区の横浜アリーナでは全国最多の2万2571人が出席して式典が開かれ、振り袖姿などの新成人が集まった会場は熱気に包まれた。



政経かながわ

2014 1/28 No.1963

contents

視点・点描	3
地元に根差す取り組みを	
講演録	4
シンポジウム「2014年の動向を読む」	
コーディネーター	神奈川新聞社論説主幹 中畠 弘孝
パネリスト	共同通信社政治部長 鈴木 博之 共同通信社経済部長 谷口 誠 共同通信社外信部長 藤井 靖
政治反射鏡	9
小泉、安倍の代理戦争	
都知事選、政党は機能不全	
政治	10
科学技術活用し新時代の五輪に	
開催成功へ「最後のご奉公」	
経済	12
植物工場の建設相次ぐ	
LED利用で栽培管理	
くらし2014	14
たかが便秘、されど便秘	
広告珍談	16
新聞広告が始まった②	
日本人が英文の広告	
NNAアジア経済レポート	17
神奈川景気データファイル	18

事務局だより

◇横浜定例講演会

2014年1月29日（水）

14時～15時30分

横浜情報文化センター 6階

「情文ホール」

講師は全日本男子柔道監督、東海大学講師の井上 康生氏
演題は「夢への挑戦～私の柔道人生」

◇2月はミャンマーツアー実施により休会

◇横浜定例講演会

2014年3月4日（火）

富士ゼロックス神奈川株式会社と共催

ホテル、ニューグランド「レインボーボールルーム」

▽基調講演 15時～16時。

講師は日本銀行横浜支店長の竹澤 秀樹氏、演題は「最近の金融経済情勢について」

▽特別講演 16時10分～17時40分。講師は東海大学副学長、神奈川県体育協会会長の山下 泰裕氏、演題は「人を育てる、人に育てられるー柔道を通して学んだこれからの生き方ー」

▽懇親会「神奈川情報交流会」
17時50分～19時30分、「ペリー来航の間」

視点 点描



地元根差す取り組みを

門出を祝う式典。一緒に出席するはずだった先輩記者の姿はなかった。

を述べ、華やかなムードに包まれた。

横須賀市内に本店を置く三浦藤沢信用金庫が1月6日、「かながわ信用金庫」(平松廣司理事長)に名称を変更した。記念セレモニーが同日、横須賀市内で開かれ、関係者約60人が出席した。地元衆院神奈川11区選出の小泉進次郎復興政務官や吉田雄人市長らが祝辞

かながわ信金は1951年、横須賀三浦信用協同組合として誕生。91年には、合併により三浦藤沢信用金庫となった。名称変更に伴い、三浦半島や藤沢、横浜市内を地盤としながら、海老名など県央エリアへの進出を視野に入れていくという。

今回の名称変更には、少子高齢

化、グローバル化などで、メガバンクや地銀との競争が激化していることを受け、5年先、10年先を考え、県内でより広く資金需要が見込める先を探し、融資に結びつけようというかながわ信金の「攻めの姿勢」を感じさせる。

県央地区では今秋、綾瀬市内に出店を予定。支店を出すことにより、祭りがあれば一緒にみこしも担ぐ間柄になるという信金らしい仕事の実現を目指すという。その動向を注目したい。

平松理事長は「さらに、地域になくてはならない信用金庫になるよう一層の努力をしていきたい」と話している。名称が変わっても、これまで掲げてきた「強くて優しい信用金庫」の原点に基づき、地元根差した取り組みに力を入れてほしい。

この名称変更の式典には、「視

点描」の執筆メンバーで、神奈川県新聞社横須賀支社長の宮本敏也さんも参加する予定だった。ところが、それは実現しなかった。昨年末、トラックにはねられ、亡くなったからだ。

かつて三浦半島の取材記者を束ねるキャップを務め、ゆかりの深い横須賀で昨年8月、支社長に就任。「地元の読者に親しまれる報道を推進したい」と強い意欲を見せていただけに、志半ばで尊い命が失われてしまったことが悲しくて、悔しくてならない。

生前、この視点描に書かれた原稿もそうだが、宮本さんは一文一文にこだわりを持ち、何度も推敲する記者だった。その味のある文章が大好きだった。もっともつと読みたかった。

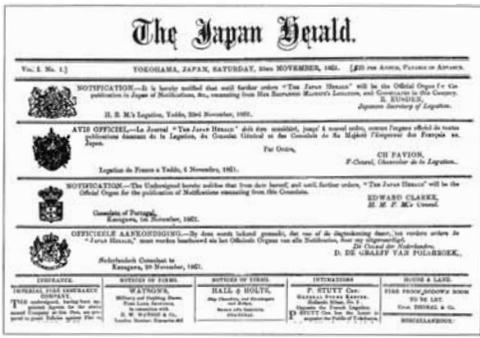
(神奈川県新聞社経済部長

石曾根 剛)

日本人が英文の広告

横浜開港資料館が発行した『横浜もののはじめ考』は、黎明期の横浜のあらゆることを綿密に教えてくれる。そのひとつが新聞のこと。

1861(文久元)年6月22日、イギリス人ハンサード(来日前はニュージランドで不動産業者とか)が、長崎で英字新聞《ナガサキ・シッピング・アドヴァタイザー》を創刊した。水・土曜日の週2回発行。4ページだて、2・3ページは記事、4ページは船舶情報。そして第1ページ全面に、



JAPANESE COAL.
THE Subscriber is in constant receipt of the best Japanese Coal, which he is prepared to dispose of at the lowest market rates. Foreigners are invited to examine his musters before purchasing elsewhere.
SU-WAI-A,
Ben-ten-do-ri Ni-tsho-mi.

いずれも「横浜もののはじめ考」より

て、日本人が始めて出した広告。《ジャパン・ヘラルド》創刊の翌年、62(文久2)年2月の掲載である。横浜弁天通のSU-WAI-Aと、諏訪屋が石炭を販売していきと。横浜開港資料館のもと研究員・斉藤多喜夫氏の調査によると、

ン・タイムス》を創刊。翌年4月6日発行に、グラバー商会在日本語で、「蒸気仕掛の鋸引」という広告を出した。蒸気で駆動する機械で、材木の製材をうけたまわると。英字新聞なのに、日本語の広告。日本人読者がいたらしい。

そのころ、外字新聞がつぎつぎと発刊された。ポルトガル人ダローザが《ジャパン・コマリーシャル・ニュース》(63年5月、週刊)、イギリス人ブラックが《ジャパン・ガゼット》(67年10月、週刊)、フランス語の《エコー・デュ・ジャポン》(70年3月)、ドイツ語の《ドイッチェ・ヤーパン・ポスト》(1902年)。どれも居留地に住む、500人ほどの各国人向け。それぞれの経営は成り立ったのだろうか。

広告が掲載された。英字新聞とはいえ、日本の新聞広告はこの日に始まったのである(まだ日本語の新聞は発行されていない。前号をご覧ください)。

ページ、公使館や領事館の布告や、外国商社の広告が載った。読者は居留地に住む外国人、年間購読料は25ドル。安いんだか高いんだか知らないけど。

開港直後から弁天通に開業した諏訪屋喜平次か、諏訪屋金次郎のどちらかが広告主だろうという。外国人も、日本人に向けて広告をした。65(慶応元)年9月8日、イギリス人リッカビーは《ジャパ

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住)「図」《ジャパン・ヘラルド》創刊号。下は1862年2月8日掲載された日本人の英文広告

ただ経営は思わしくなく、28

下図は居留地の外国人に向かっ